

「仕事ができる社員、できない社員」という本から

楽観的な人、悲観的な人「イメージ」一つで仕事はここまで変わる

「いいイメージ」を持つことは、とても重要なことです。「いいイメージ」を持つ習慣は、自分の実力を押し上げることへとつながっています。人は多かれ少なかれ自信をもっていますが、自信があるだけでは結果につながりません。「努力」に裏打ちされた自信によって、自分の中に「いいイメージ」をつくっていき、その「いいイメージ」を原動力にしてさらに努力を重ねた結果、より大きな「自信」となっていくのです。このサイクルが常にあります。

では、「努力」とは何でしょうか。簡単にいうなら、練習や訓練、経験を積むことであり、会社に当てはめれば、究極的に売り上げを増やすために力を尽くして励むことです。つまり、あらゆる仕事がそこに含まれます。そういった努力を徹底してやっていくことで、いいイメージと自信の相乗効果をつくり出して、その人の実力レベルを押し上げていきます。ときには実力以上のものを発揮できるようにもなります。私はゴルフをしますが、時々調子がいいと、「いつからそんなにうまくなったの？」と同行者に不思議がられるくらいうまくいくことがあります。それを自分の実力というにはおこがましく、つまり「実力以上のものを発揮できる」とはそういう状況であるわけです。逆に、自分の抱くイメージが悪ければ、実力レベルは間違いなく下がります。私がよく行くゴルフ場に、よほど下手をするか、そこを狙って打ちでもしないと落ちるわけがない池のあるホールがあるのですが、不思議なことに、私はそこで何度ボールを落としたかわかりません。私自身が「このホールとは相性が悪い」と無意識にイメージしてしまうから、狙っても入らないような池に入れてしまうのです。まさに人の持つイメージが現実にも強く影響することの実証例ではないかと思えます。

実力を上げるためには「自信」と「いいイメージ」という二つの要素がとても重要です。水泳・平泳ぎの北島康介選手は、自分が勝った試合のビデオを何度も見るそうです。これは「いいイメージ」を自分の中につくって自信を持つためであり、極限まで力を引き出す必要のあるスポーツにおいては、自信とイメージの効果が如実に表れます。実力があるということは、実力を十分に発揮できるということでもあるのです。会社も同じで「勝ちゾーン」に入っていると、何でもうまくいきます。勝ちパターンができてくる、ともいえるでしょう。会社自体が順調に伸びているのを感じられると、社員の自信につながるのです。勢いのある会社は、そこに勤める人や関係する会社などを巻き込んでいきます。「あの会社は勢いがある」と取引先にも一目置かれて頼りにされたり、無理な注文にも頑張っただけで応えようとしてくれたりするものです。逆に不思議なもので、いったん負けてしまうと、悪いイメージが社員に影響したり、周りが積極的に関わってくれなくなったりして、一度の失敗が原因で坂道を転がり落ちるように勢いがなくなってしまうこともあります。

また、いいイメージを持つことは、リーダーの資質としても絶対的に必要な要素です。暗い影を背負ったリーダーについていく部下はいません。後ろ向きで、ネガティブ思考で、最悪のイメージしか思い描けない人に「会社をつくるからついてきてほしい」と請われても、躊躇してしまうはずです。だから楽観的なのがよい、というのも少し違います。心の持ち方として楽観的であることは、自分らしさや常識的な考え方を保つためには必要です。しかし、その前に最大限の努力をしたうえで、最後の最後に「ここまでやったのだから何とかなるだろう」と楽観的に構えることが前提です。常に楽観的ではいけません。「先々悪い方向へ行きそうだと予想されることは徹底的に洗い出し、事前に手を打っておきます。そうして万事を尽くして天命を待つだけの段階になったら、うまくいくことを信じて待つ以外にないでしょう。つまり、仕事ができる社員は、悲観的に準備して、楽観的に考えます。どちらも基本には「いいイメージ」があり、結果をそのイメージに近づけるための努力をするわけです。最悪のイメージから逃れるための対策を考えるのではなく、最良のイメージに近づけるための工夫を考える—。この思考の方向性を身につけると、仕事ができる人へと一歩近づけます。

仕事ができる社員は、どんな準備をして、どのように考えますか？

()